

攻撃的ユーモアはポジティブな対人的機能をもつのか： 相手との親密度と攻撃的ユーモアの攻撃度からの検討

塚脇 涼太

(比治山大学)

本研究の目的は、攻撃的ユーモアのポジティブな対人的機能を実験的に検討することであった。独立変数は相手との親密度（高、低）と攻撃的ユーモアの攻撃度（高、低、統制条件）であり、統制条件はユーモアを含まない発話を設定した。従属変数は、攻撃的ユーモアを言われた際の、相手への対人認知、肯定的感情、否定的感情、関係継続意思の4つであった。実験参加者に、親密度と攻撃的ユーモアの攻撃度が操作された6種類のシナリオの1つを無作為に配布し、従属変数の測定を行った。その結果、攻撃的ユーモアはその攻撃度の高低に関わらず、否定的感情を生起させた。攻撃度が高いユーモアは、対人認知を悪くし、関係継続意思を低めた。相手との親密度が低い場合に、攻撃度が高い攻撃的ユーモアは、肯定的感情を抑制した。相手との親密度が高い場合で、攻撃度が低い攻撃的ユーモアに限り、肯定的感情を生起させるというポジティブな対人的機能が示された。

キーワード：攻撃的ユーモア、親密度、対人認知、感情、関係継続意思

問 題

ユーモア (humor) とは、多義的な概念であり、面白さ、可笑しさ、楽しさといった感情 (野村・丸野, 2008; 伊藤, 2007) や、それを喚起させる刺激や特性 (Colman, 2001; Gruner, 1976; 塚脇・深田・樋口, 2011) を指して用いられる。本研究では、後者の意味でユーモアという語を用いる。対人コミュニケーションにおいて使用されるユーモアは、駄洒落や他愛のない言葉遊びなどの攻撃的内容を含まない“遊戯的ユーモア”、自己の欠点の笑い話や失敗談などの自己への攻撃を内容に含む“自虐的ユーモア”、からかい、皮肉、あるいは冷やかしなどの他者への攻撃を内容に含む“攻撃的ユーモア”の3つに分類されることが明らかとされている (塚脇・樋口・深田, 2009a)。このうち、攻撃的ユーモアについては、次で述べるように対人関係における使用の危険性が指摘されている。

攻撃的ユーモアの対人的機能に関する先行研究の概観

牧野 (2007) は、攻撃的ユーモアは立場の弱者やマイノリティに向けられることが多いため、いじめの初期段階でみられることが多いと述べている。文部科学省 (2016) が行った「児童生徒の

問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において、いじめの様態として最も多くあげられたのは“冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる（63.5%）”であり、牧野（2007）の主張を裏付けている。攻撃的ユーモアに含まれる、からかい（teasing）に焦点を当てた研究では、からかいの受け手（target）は、送り手（teaser）が推測するよりも、ネガティブ感情を生起させており、ネガティブな意図を読み取りやすいことなどが示されている（Endo, 2007; 遠藤, 2007, 2008; Keltner, Young, Heerey, Oemig, & Monarch, 1998; Kowalski, 2000; Kruger, Gordon, & Kuban, 2006）。また、攻撃的ユーモアの使用傾向は、ソーシャル・サポートの授受と負の関連性が示されていることから（Martin, Publik-Doris, Larsen, Gray, & Weir, 2003; 塚脇他, 2011）、対人関係における攻撃的ユーモアの使用は、ネガティブな帰結をもたらす可能性が高いと考えられている。

しかし、こういった知見とは対照的に、攻撃的ユーモアのポジティブな対人的機能¹⁾について言及する研究者が多く存在する。そこでは、攻撃的ユーモアは、相手に屈辱を感じさせるためや嫌がらせをするために使用される場合もあるが、多くの場合は好意や愛情を示したり、社会的なつながりを高めたりするために使用されると述べている（Keltner, Capps, Kring, Young, & Heerey, 2001; Keltner et al., 1998; Mooney, Creeser, & Blatchford, 1991; Radcliffe-Brown, 1952 青柳訳 1975; Shapiro, Baumeister, & Kessler, 1991）。例えば、Keltner et al. (1998) は、からかいは批判と同時に称賛であり、攻撃であると同時に人を親密にし、侮辱であると同時に親愛の表現であると述べている。ただし、このような攻撃的ユーモアのポジティブな対人的機能は、厳密な実験的研究によって解明が試みられているわけではない。その理由は、実験刺激となるユーモアの作成が困難であるといった方法論上の問題点や、緊急に対応を迫られているいじめやハラスメントの問題として攻撃的ユーモアを捉え、その危険性を早急に示す必要があったためであると考えられる。しかし、攻撃的ユーモアがポジティブな対人的機能を有するには、どのような条件が必要なのかを特定していくことは、結果として攻撃的ユーモアの誤った使用を解明することにも繋がるため、その社会的意義は大きいと考えられる。

対人関係において攻撃的ユーモアがポジティブな機能をもつための条件

では、対人関係において攻撃的ユーモアがポジティブな機能を持つにはどのような条件が必要なのだろうか。Keltner et al. (1998) は、からかいが辞義どおりの意味ではないことを語調の変化や表情などの手がかりによって伝達する必要があると述べているが、本研究では、第1の要因として、相手との親密度の要因を取り上げたい。Norrick (1994) は、対話者同士の心理的な結束が強まるに従って、攻撃的ユーモアは相手に親しみを感じていることを伝えるメタメッセージを含むため、相手に心地よさを伝えると指摘している。遠藤 (2008) は、からかいは関係をただ深めるというより、親密であることが相互に確認できている間柄において許され、そのような場合に限り相互関係を深化させる機能を持つと述べている。これらの指摘は、攻撃的ユーモアがポジティブな効果を持つための条件として、相手との親密度の要因が重要であることを示している。攻撃的ユーモアは、辞義的には相手への攻撃を含んでいるが、その言外にある親しみの伝達という意図を、当事者同士が理解できるほど親密である場合に、ポジティブな機能をもつものと考えられる。親密度の要因は、攻

撃的ユーモアが対人関係においてポジティブな機能をもつための基盤となる要因であると考えられる。

しかし、親密な関係であれば、どのような攻撃的ユーモアであってもポジティブな機能を有するとは考えにくい。Radcliffe-Brown (1952 青柳訳 1975) は、親しい者同士の間では、限度を超えないのであれば、からかいは許容される傾向があり、むしろ、そのようなやりとりを通して、相互の結びつきが強まると述べている。また、大淵 (2002) は、からかわれた対象が傷つかないことが原則であり、傷ついてしまうのならば関係はむしろ阻害されると述べている。つまり、攻撃的ユーモアの攻撃度が高い場合には、親密な間柄であったとしても攻撃的ユーモアはネガティブな対人的機能をもつ可能性が高いと考えることができる。そこで本研究では、攻撃的ユーモアがポジティブな対人的機能をもつための第 2 の要因として、攻撃的ユーモアの攻撃度の要因を取り上げる。

本研究の目的

以上の議論を踏まえて、本研究では親密度の要因と攻撃的ユーモアの攻撃度の要因を操作し、場面想定法を用いた質問紙実験によって、攻撃的ユーモアの対人的機能を検討する。対人的機能としては、まず感情レベルの指標として、からかい研究 (e.g., Kruger et al., 2006) が扱ってきた攻撃的ユーモアを言われた際の受け手の感情反応を取り上げる。また、先行研究において、攻撃的ユーモアは送り手と受け手の関係性に影響を及ぼすことが議論されている (e.g., 遠藤, 2008; Radcliffe-Brown, 1952 青柳訳 1975) ことから、認知レベルの指標として送り手への対人認知を、行動レベルの指標として送り手との関係継続意思を取り上げる。この目的に沿って、実験で使用するための攻撃的ユーモアを収集するための予備調査 1、および選定するための予備調査 2 を実施する。仮説は以下の通りである。

仮説 1：親密度が高い関係性では、攻撃的ユーモアは攻撃度が低い場合にはポジティブな対人的機能をもつが、攻撃度が高い場合にはネガティブな対人的機能をもつ。

仮説 2：親密度が低い関係性では、攻撃的ユーモアはその攻撃度の高低に関わらず、ネガティブな対人的機能をもつ。

予備調査 1

予備調査 1 は、本実験で使用するユーモアの収集が目的であった。中国地方の国立大学の学生 61 名 (男性 29 名、女性 32 名、平均年齢 20.21 歳、 $SD = 1.20$) に対して、集合調査法による調査を実施した。調査では、まず、架空の人物 A、B が登場する場面を 2 つ設定した。場面の内容は、からかい研究において、外見や容姿に関する内容が最も一般的であるという知見 (遠藤, 2008) を参考に、大学生にとって身近であり、親密度の程度によっても不自然ではないことなどを考慮に入れて設定した。場面 1 は、B が体育の授業で体育館に入るために靴を脱いだところ、靴下に穴が空いており、それを A に指摘されるという場面であった。場面 2 は、授業中に B の洋服に購入時の値札がついたままになっており、それを A に指摘されるという場面であった。調査では、各場面を 6 コマ

から構成される漫画で提示した。参加者に2つの場面を提示し、Aの立場から、出来るだけ多くの面白おかしい台詞を自由に考え、記述するよう教示した。収集されたユーモアの中から、内容が類似するものはまとめ、意味内容が不明なものや、長すぎるもの、不自然なものは除外した。結果、場面1では37個、場面2では34個のユーモアが収集された。

予備調査2

予備調査2は、実験で使用する攻撃的ユーモアの選定が目的であった。中国地方の国立大学の学生125名（男性51名、女性74名、平均年齢19.94、 $SD = 1.20$ ）に対して、集合調査法による調査を実施した。調査では、参加者に、予備調査1と同様の2つ場面のどちらか一方が漫画によって記載された調査用紙を無作為に配付した。そして、6コマ目（AがBに指摘をするコマ）において、予備調査1で収集したユーモアを項目として提示し、第3者の視点から次の2点について評定するよう求めた。(a) ユーモアの攻撃度：教示を“以下に示す台詞はどの程度攻撃的ですか？”と与え、“全く攻撃的でない（1点）”、“多少攻撃的である（2点）”、“わりと攻撃的である（3点）”、“だいぶ攻撃的である（4点）”、“非常に攻撃的である（5点）”の5段階で評定を求めた。(b) ユーモアの面白おかしさ：教示を“以下に示す台詞はどの程度面白おかしいですか？”と与え、“全く面白おかしくない（1点）”、“多少面白おかしい（2点）”、“わりと面白おかしい（3点）”、“だいぶ面白おかしい（4点）”、“非常に面白おかしい（5点）”の5段階で評定を求めた。なお、この2つの変数の評定順についてはカウンターバランスをとった。

各ユーモアの攻撃度得点、および面白おかしさ得点の平均値を用いて、実験で用いる攻撃的ユーモアの選定を行った。選定の基準として、攻撃度の得点と面白おかしさの得点が2.0以上のユーモアを攻撃的ユーモアと操作的に定義し、選定を行った。その結果、場面2では、攻撃度の高低の操作が可能なユーモアが十分に確保できなかったため、本実験では場面1のみを扱うこととした（補助資料参照）。場面1において、攻撃度が低いユーモア（2.0～3.0）を3つと、攻撃度が高いユーモア（3.0以上）を3つ、計6つ選定した。調査で使用した場面1における各ユーモアの評定値、および選定結果を表2に示した。

選定した6つのユーモアの面白可おかしさの得点について分散分析を行ったが、有意な効果は示されなかった($F(5, 285) = 2.33, ns, \eta_p^2 = .039$)。このことから、選定したユーモアの面白おかしさは、ある程度統制されているといえる。また、攻撃度の得点について分散分析を行った結果、有意な効果が示され($F(5, 285) = 42.51, p < .001, \eta_p^2 = .427$)、有意水準を5%とするHolm法による多重比較（以後、同様の方法による）をおこなったところ、攻撃度が高いユーモア（項目20、項目25、項目30）が、低いユーモア（項目15、項目16、項目21）よりも得点が高かった。同一水準内である項目25と項目30、および項目15と項目16の間にも有意な差が示されたものの、攻撃度の高いユーモアと低いユーモアを選出することに成功したといえる。

表1 場面1で使用した各ユーモアの攻撃度と面白おかしさの評定値、および選定結果

項目としてのユーモア	面白 おかしさ	攻撃度	選定 結果
1. 親指が外に出たがっているよ。	1.84 (0.99)	1.84 (1.01)	
2. 穴があったら入りたいでしょ。ここにいい穴があるよ。	2.79 (1.39)	2.48 (1.26)	
3. 親指じゃじゃ馬だね。	2.53 (1.31)	1.60 (0.67)	
4. 親指が寒がってるよ。	2.19 (1.13)	1.41 (0.68)	
5. 親指の誕生だね。	2.83 (1.27)	1.45 (0.78)	
6. ついに足が脱皮し始めたね。	2.76 (1.47)	1.72 (0.93)	
7. 親指自慢するなら、もっときれいにしたら？	1.79 (1.02)	3.78 (1.04)	
8. かわいい親指ですね。	2.10 (1.17)	1.83 (0.94)	
9. 水虫？通気性確保？やばくない？	2.34 (1.40)	3.57 (1.20)	
10. 今はいてる靴下あげようか？	1.69 (0.82)	2.66 (1.02)	
11. どうせなら全部出しちゃえ！	2.09 (1.13)	1.71 (0.88)	
12. すごく精巧な靴下の柄だね。親指が出てると思った。	2.79 (1.29)	2.22 (1.26)	
13. どんだけ親指アピールするの？	2.34 (1.19)	3.14 (1.19)	
14. 新しい靴下を買うお金もないなんて…。10円あげようか？	1.93 (1.11)	3.38 (1.36)	
15. そのファッション流行ってるの？	2.21 (1.02)	2.84 (1.36)	L
16. 良いダメージ加工だね。	2.55 (1.14)	2.19 (1.02)	L
17. 後でお母さんがアップリケつけてあげましょうねー。	2.47 (1.33)	2.71 (1.27)	
18. 君の欲望がはみ出てるよ。	3.19 (1.33)	2.53 (1.34)	
19. 靴下買ってあげようか？靴下買ってあげようか？	2.05 (1.19)	3.28 (1.42)	
20. 親指出してる暇があったら課題のレポート出したら？	2.02 (1.25)	3.84 (1.30)	H
21. 虫に食べられたの？自分で食べたの？	2.48 (1.22)	2.45 (1.08)	L
22. 来る途中で事故にでもあったの？	2.38 (1.17)	1.67 (0.71)	
23. 親指には世界は狭すぎたんだね。	3.40 (1.15)	1.66 (0.87)	
24. 君はそんな靴下におさまるような人じゃないってことだよ。	2.88 (1.23)	1.55 (0.75)	
25. 君の人間性のように薄っぺらいくつ下だね。	2.22 (1.34)	4.07 (1.01)	H
26. おいっ！親指が脱走しようとしてるよ！君とはやっとなんてさ！	2.60 (1.32)	2.40 (1.26)	
27. 親指がこんにちはしてるよ。	2.34 (1.12)	1.64 (0.89)	
28. 足のほうのお父様は相当でしゃばりなんだね。	2.24 (1.37)	2.16 (1.11)	
29. 親指全開！！	2.29 (1.28)	1.52 (0.80)	
30. やっと芽が出たね。君に春は来ないだろうけど。	2.34 (1.29)	3.55 (1.33)	H
31. いつでも逃げれるように、グリップ力あげてるんだね。	2.31 (1.31)	2.00 (1.01)	
32. 指紋採取されたの？	2.28 (1.27)	1.93 (1.02)	
33. 今日は露出多めだね。	2.71 (1.36)	1.88 (1.06)	
34. さりげないワンポイントがオシャレだね。	2.16 (1.07)	1.98 (1.03)	
35. 最近の靴下ダメージ加工まであるんだね。	2.29 (1.23)	2.22 (1.20)	
36. 10年もののヴィンテージ品？	2.07 (1.11)	2.28 (1.18)	
37. 何キロ走ってきたんだよ。	2.17 (1.22)	1.98 (1.05)	

注1) 括弧内の数値は標準偏差を示す。

注2) 選定結果欄のLは攻撃度の低いユーモアとして、Hは攻撃度が高いユーモアとして選定されたことを示す。

方 法

実験参加者

大学生 263 名（男性 172 名、女性 91 名、平均年齢 19.3、 $SD = 1.37$ ）が実験に参加した。

実験計画

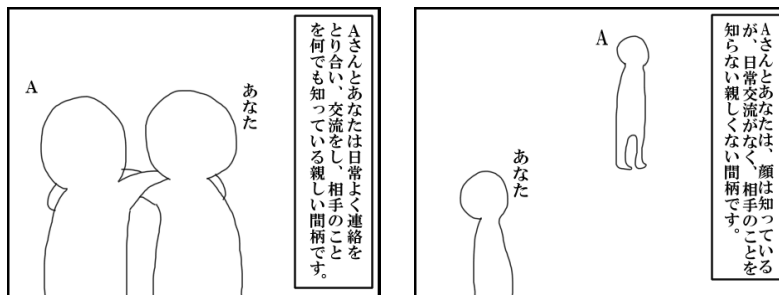
2（親密度：高、低）×3（攻撃的ユーモアの攻撃度：高、低、統制条件）の 2 要因実験参加者間計画であった。統制条件は、客観的事実（靴下に穴が開いているね。）を伝えるものであり、攻撃的ユーモアの対人的機能を判断するために設定した。以下、新密度と攻撃的ユーモアの攻撃度に関する高低は HL と表記する。

実験手続きの概要

親密度と攻撃的ユーモアの攻撃度の操作、従属変数の測定は、全て質問紙で行った。実験参加者の各群への無作為配置は、親密度要因と攻撃的ユーモアの攻撃度要因を組み合わせた 6 条件の質問紙を無作為配布することで行った。ただし、攻撃的ユーモアの攻撃度 H 条件と L 条件では 3 種類のユーモアがほぼ同数になるようにした。

質問紙

予備調査で設定した場面の「B さん」を「あなた」に変更して使用した。つまり、実験参加者に攻撃的ユーモアの受け手として漫画を読むように求めた。親密度の操作は、漫画の 2 コマ目に図 1 に示したコマを挿入することで行った。



測定変数

対人認知 攻撃的ユーモアの対人的機能を認知的な側面から測定するため、林（1978）の対人認知尺度から“感じの悪いー感じの良い”、“知的でないー知的な”、“内向的なー外交的な”、“親しみにくいー親しみやすい”、“頼りないーしっかりした”、“消極的なー積極的な”、“単純なー想像力に富んだ”、“冷たいー温かい”、“非社交的なー社交的な”の 9 項目を使用し、両極 7 段階評定で回答

を求めた。教示を“Aさんのセリフを聞いて、あなたはAさんに以下の印象をどの程度持ちましたか？”と与え、中点を“どちらでもない(4点)”とし、両極に向かって“わりと(左方向で3点、右方向で5点)”、“だいぶ(左方向で2点、右方向で6点)”、“非常に(左方向で1点、右方向で7点)”と配置した。中点4点を基準として、得点が高いほどポジティブ、低いほどネガティブな対人認知がなされたことを表す。

感情 攻撃的ユーモアの対人的機能を感情的な側面から測定するため、寺崎・岸本・古賀(1992)の多面的感情尺度から、肯定的感情として“快調な”、“気持ちの良い”、“陽気な”の3項目を選出し、独自に“嬉しい”、“楽しい”、“愉快な”を加えた計6項目を使用した。また、否定的感情として“敵意のある”、“挑戦的な”、“むっとした”、“かつとした”、“おこった”、“気分を害した”の6項目を使用した。教示を“Aさんのセリフを聞いて、あなたは以下の感情をどの程度感じますか？”と与え、“全く感じない(1点)”、“わずかに感じる(2点)”、“わりと感じる(3点)”、“非常に感じる(4点)”の単極4段階評定で回答を求めた。それぞれ得点が高いほど肯定的または否定的感情が生じたことを表す。

関係継続意思 攻撃的ユーモアの対人的機能を行動意思の側面から測定するため、関係継続意思を測定する項目を作成して使用した。教示を“Aさんのセリフを聞いて、あなたはAさんとどの程度関係を続けたいと思いますか？”と与え、“続けたくないー続けたい”の1項目に対して、両極7段階評定で回答を求めた。反応カテゴリと得点化は対人認知の項目と同様であり、中点4点を基準として、得点が高いほど関係継続意思が高まったことを、低いほど関係継続意思が低まったことを表す。

送り手の意図の認知 攻撃的ユーモアの対人的機能の生起過程を探索的に検討するために、送り手の意図の認知を測定する項目を作成して使用した。教示を“Aさんのセリフには、以下の意図がどの程度含まれていると思いますか？”と与え、“敵意的ー親和的”の1項目に対して、両極7段階で回答を求めた。反応カテゴリと得点化は対人認知の項目と同様であり、中点4点を基準として得点が低いほど敵意的な意図を、高いほど親和的な意図を認知したことを表す。

面白おかしさの認知 攻撃的ユーモアの対人的機能の生起過程を探索的に検討するために、ユーモアの面白おかしさの認知を測定する項目を作成して使用した。教示を“Aさんのセリフは、どの程度面白おかしいと思いますか？”と与え、“全く面白おかしくない(1点)”、“わずかに面白おかしい(2点)”、“やや面白おかしい(3点)”、“わりと面白おかしい(4点)”、“だいぶ面白おかしい(5点)”、“非常に面白おかしい(6点)”の単極6段階で回答を求めた。得点が高いほど、Aさんの発話から面白おかしさを認知したことを表す。

操作チェック項目 親密度と攻撃的ユーモアの攻撃度の操作チェックのための項目として、親密度の認知と攻撃的ユーモアの攻撃度の認知をそれぞれ1項目で測定した。親密度の認知は“あなたとAさんはどの程度親密ですか？”と尋ね、“全く親しくない(1点)”、“わずかに親しい(2点)”、“やや親しい(3点)”、“わりと親しい(4点)”、“だいぶ親しい(5点)”、“非常に親しい(6点)”の単極6段階評定で回答を求めた。攻撃的ユーモアの攻撃度の認知は“Aさんのセリフは、どの程度あなたに対して攻撃的だと思いますか？”と尋ね、“全く攻撃的でない(1点)”、“わずかに攻撃

的である（2点）”、“やや攻撃的である（3点）”、“わりと攻撃的である（4点）”、“だいぶ攻撃的である（5点）”、“非常に攻撃的である（6点）”の単極6段階評定で回答を求めた。

結 果

各従属変数の記述統計量および信頼性係数

対人認知尺度9項目についてCronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha=.81$ と十分な値であった。また、ポジティブ感情とネガティブ感情を測定する各6項目についても、 $\alpha=.89$ 、 $\alpha=.94$ と十分な値であった。そのため、各変数を構成する項目得点の平均値を分析で使用した。各変数の平均値と標準偏差を条件別に表2に示した。

操作チェック

親密度の操作チェックのため、親密度の認知を従属変数とする親密度×攻撃的ユーモアの攻撃度の分散分析を行った。その結果、親密度の主効果が認められ($F(1, 257) = 225.93, p < .001, \eta_p^2 = .468$)、親密度H条件($M = 4.50, SD = 1.12$)がL条件($M = 2.42, SD = 1.21$)よりも得点が高かった。また、攻撃的ユーモアの攻撃度の主効果も認められ($F(2, 257) = 9.47, p < .001, \eta_p^2 = .07$)、多重比較の結果、L条件($M = 3.75, SD = 1.53$)と統制条件($M = 3.63, SD = 1.47$)が、H条件($M = 3.02, SD = 1.60$)よりも得点が高かった。

攻撃的ユーモアの攻撃度の操作チェックのため、攻撃的ユーモアの攻撃度認知を従属変数とする親密度×攻撃的ユーモアの攻撃度の分散分析を行った。その結果、親密度の主効果が有意であり($F(1, 257) = 25.98, p < .001, \eta_p^2 = .092$)、L群($M = 3.08, SD = 1.57$)がH群($M = 2.34, SD = 1.32$)よりも得点が高かった。また、攻撃的ユーモアの攻撃度要因の主効果が有意であり($F(2, 257) = 61.40, p < .001, \eta_p^2 = .323$)、H条件($M = 3.75, SD = 1.46$)がL条件($M = 2.61, SD = 1.26$)と統制条件($M = 1.78, SD = 1.01$)よりも得点が高く、L条件が統制条件よりも得点が高かった。

以上より、各操作チェック項目においては、操作を意図した要因以外の主効果も生じていることが示された。この結果は、親密度の操作と攻撃的ユーモアの攻撃度の操作は完全に独立しておらず、相手との新密度によって攻撃的ユーモアの攻撃度は影響を受け、攻撃的ユーモアの攻撃度によって相手との新密度は影響を受けることを示している。しかし、操作を意図した要因における主効果の効果量は、操作を意図しなかった要因の主効果と比較しても十分な値であり、操作を意図した要因における条件間の差の方向性も期待した通りであったことから、操作は有効であると判断し、以後の分析を行なった。

表2 条件別の各変数の平均値と標準偏差

親密度要因	攻撃度要因	n	対人認知	肯定的感情	否定的感情	関係継続意思	親密度の認知	攻撃度の認知
	H条件	44	3.90 (0.74)	1.55 (0.65)	2.56 (0.82)	4.07 (1.56)	4.00 (1.29)	3.25 (1.30)
H条件	L条件	44	4.83 (0.78)	2.36 (0.77)	1.54 (0.54)	5.39 (1.24)	4.80 (0.88)	2.30 (1.13)
	統制条件	44	4.61 (0.63)	1.85 (0.74)	1.26 (0.52)	5.43 (1.17)	4.71 (0.93)	1.52 (0.95)
	H条件	45	3.51 (0.91)	1.33 (0.53)	2.92 (0.72)	2.84 (1.68)	2.07 (1.27)	4.29 (1.41)
L条件	L条件	39	4.44 (0.80)	1.88 (0.78)	1.79 (0.67)	4.31 (1.51)	2.56 (1.17)	2.97 (1.33)
	統制条件	47	4.26 (0.69)	1.62 (0.61)	2.07 (0.94)	4.60 (1.04)	2.62 (1.13)	2.02 (1.01)

攻撃的ユーモアの対人的機能

攻撃的ユーモアの対人的機能を検討するため、各従属変数に対して、新密度（H、L）×攻撃的ユーモアの攻撃度（H、L、統制条件）の分散分析を行なった。分析における検定統計量および効果量を整理して表3に示した。

対人認知 対人認知に対する分析の結果、親密度の主効果が有意であり、H条件がL条件よりも高かった。また、攻撃的ユーモアの攻撃度の主効果が有意であり、多重比較の結果、L条件と統制条件がH条件よりも高かった。仮説に従い、親密度の各水準における攻撃度の単純主効果および多重比較の検定を行ったが、各水準における差のパターンは主効果と同様であった。

感情 肯定的感情に対する分析の結果、親密度の主効果が有意でありH条件がL条件よりも高かった。また、攻撃的ユーモアの攻撃度の主効果が有意であり、多重比較の結果、L条件が統制条件とH条件よりも高く、統制条件がH条件よりも高かった。仮説に従い、親密度の各水準における攻撃的ユーモアの攻撃度の単純主効果および多重比較の検定を行ったところ、共に有意であった。多重比較の結果、親密度H条件ではL条件が統制条件とH条件よりも高く、統制条件がH条件よりも高かった。親密度L条件では、L条件と統制条件がH条件よりも高かった（表4）。

否定的感情に対する分析の結果、親密度の主効果が有意であり、L条件がH条件よりも高かった。また、攻撃的ユーモアの攻撃度の主効果が有意であり、多重比較の結果、H条件がL条件と統制条件よりも高く、L条件が統制条件よりも高かった。仮説に従い、親密度の各水準における攻撃度の単純主効果および多重比較の検定を行ったが、各水準における差のパターンは主効果と同様であった。

関係継続意思 関係継続意思に対する分析の結果、親密度の主効果が有意であり、H条件がL条件よりも高かった。また、攻撃的ユーモアの攻撃度の主効果が有意であり、多重比較の結果、統制条件とL条件がH条件よりも高かった。また、仮説に従い、親密度の各水準における攻撃度の単純主効果および多重比較の検定を行った。しかし、各水準における差のパターンは主効果と同様であった。

表3 各従属変数に対する分散分析と多重比較の結果

	親密度 ($df = 1, 257$)			攻撃的ユーモア の攻撃度 ($df = 2, 257$)		
	F	η_p^2	差の方向	F	η_p^2	多重比較
対人認知	16.25**	.059	H > L	36.00**	.219	L = 統 > H
肯定的感情	11.70**	.044	H > L	20.55**	.138	L > 統 > H
否定的感情	11.24**	.042	L > H	100.52**	.439	H > L > 統
関係継続意思	37.66**	.128	H > L	34.10**	.209	統 = L > H

** $p < .001$

表4 肯定的感情に対する親密度要因の
各水準における単純主効果と多重比較の結果

	F	η_p^2	多重比較
親密度H条件	15.27**	.191	L > 統 > H
親密度L条件	6.80**	.096	L = 統 > H

** $p < .001$

肯定的感情の生起過程の分析

親密度が高い場合に、攻撃度が低い攻撃的ユーモアは肯定的感情を生起させることが示されたため、その生起過程の分析を探索的に行った。親密度要因によって参加者を親密度 H 群と L 群の 2 つに分け、これを母集団とする多母集団同時分析を行った。石村・石村 (2012) に従い、0 と 1 の 2 値によって攻撃的ユーモアの攻撃度要因 3 条件 (攻撃度 H 条件、攻撃度 L 条件、統制条件) のそれぞれをダミー変数化し、モデルで使用した。ただし、モデルから統制条件のダミー変数は除外した。これにより、攻撃度 H 条件と L 条件から他の変数への影響力は、統制条件を基準とした値が算出される。初期モデルでは、攻撃度 H 条件と L 条件が、親和的意図の認知、攻撃度の認知、面白おかしさの認知を介して肯定的感情に影響を及ぼすというモデルを仮定した。このモデルについて分析を行ったところ、適合度は低い値であったため、修正指数を参考に攻撃度 H 条件と L 条件間に共分散を仮定し、攻撃度の認知は意図の認知を介してポジティブ感情に影響を及ぼすと仮定した。その結果、適合度は許容範囲内となった (GFI=.971、AGFI=.894、CFI=.979、RMEA=.066)。最終的なモデルを図 2 に示した。

2 つの母集団に共通であった結果からみると、“攻撃度 H 条件”が“意図の認知”に有意な負の影響を、“攻撃度の認知”と“面白おかしさの認知”に有意な正の影響を及ぼしていた。“攻撃度 L 条件”は“攻撃度の認知”に有意な正の影響を及ぼしていた。また、“攻撃度の認知”は“親和的意図の認知”に有意な負の影響を及ぼしていた。“親和的意図の認知”と“面白おかしさの認知”は“肯定的感情”に有意な正の影響を及ぼしていた。2 つの母集団に相違が示されたのは、“攻撃度 H 条件”と“攻撃度 L 条件”から“面白おかしさの認知”へのパスであり、共に親密度 H 群に

おいてのみ有意な正の影響が示された。“攻撃度 H 条件”と“攻撃度 L 条件”から肯定的感情への標準化総合効果と“親和的意図の認知”と“面白おかしさの認知”を介した標準化間接効果を表 5 に示した。最後に、各パス係数の強さに群間で差があるのかを分析したところ、“攻撃度 L 条件”から“面白おかしさの認知”へのパスにおいて、親密度 H 群が L 群よりも強いという結果が示された ($z = 2.68, p < .01$)。

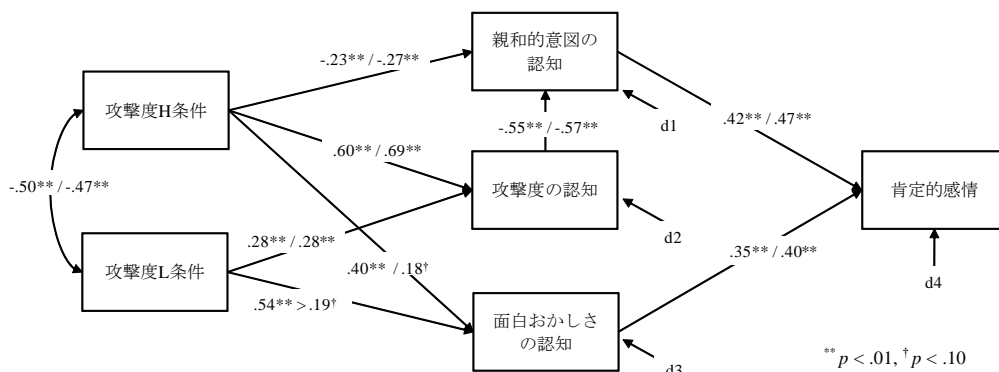


図 2 攻撃的ユーモアによる肯定的感情の生起過程に関するモデル。

注 1) 数値は標準化係数である。

注 2) 数値はスラッシュの左が親密度 H 群、右が親密度 L 群である。ただし、群間で有意な差が示されたパスは、差の方向性を不等号で示した。

表 5 攻撃度 H 条件と L 条件から肯定的感情に対する標準化総合効果、および親和的意図の認知と面白おかしさの認知を介した標準化間接効果

	親密度 H 群		親密度 L 群	
	攻撃度 H	攻撃度 L	攻撃度 H	攻撃度 L
標準化間接効果				
親和的意図の認知	-.232	-.062	-.309	-.074
面白おかしさの認知	.138	.188	.071	.072
標準化総合効果	-.094	.126	-.238	-.002

考 察

本研究では、相手との親密度とユーモアの攻撃度が、攻撃的ユーモアの対人的機能に及ぼす影響を検討した。対人的機能としては、対人認知、肯定的感情、否定的感情、および関係継続意思という4つを設定した。

攻撃的ユーモアの対人的機能

分散分析の結果、相手との親密度が高い場合に、攻撃度の低い攻撃的ユーモア（以下、攻撃度 L ユーモアとする）は肯定的感情を生起させるというポジティブな対人的機能を持ち、攻撃度の高い攻撃的ユーモア（以下、攻撃度 H ユーモアとする）は、肯定的感情を抑制するというネガティブな対人的機能をもつことが明らかとなった。ただし、このような結果はその他の3つの従属変数では確認されず、仮説1は限定的な従属変数においてのみ支持された。また、相手との親密度が低い場合に、攻撃度 H ユーモアは肯定的感情を抑制するというネガティブな対人的機能が示された。しかし、攻撃度 L ユーモアにはこのような結果は示されず、仮説2は、肯定的感情という限定的な従属変数において、部分的に支持された。対人認知と関係継続意思においては、相手との親密度に関わりなく、攻撃度 H ユーモアのみがネガティブな対人的機能を示し、否定的感情においては、相手との親密度に関わりなく、攻撃度 H・L ユーモアが共にネガティブな対人的機能を示した。以上の結果をみると、攻撃度 H ユーモアは、本研究で設定した4つの従属変数全てにおいてネガティブな対人的機能を示していることから、対人関係における使用の危険性（e.g., 牧野, 2007）が改めて確認されたといえる。しかし、攻撃度 L ユーモアは、否定的感情においてネガティブな対人的効果を示したものの、相手との親密度が高い場合には肯定的感情を生起させるというポジティブな対人的機能をもつことが示された。特定の条件下においてであれば、攻撃的ユーモアがポジティブな対人的機能をもつ可能性を初めて示した点は、本研究の成果であったといえるだろう。

肯定的感情の生起過程

攻撃度 L ユーモアが肯定的感情を生起させる過程について明らかにするため、多母集団同時分析を行なった。結果から、以下のことが示された。攻撃度 H ユーモアは、直接的に、あるいは発話が攻撃的であるという認知を介して、受け手の親和的な意図の推論を弱め、その結果、肯定的感情を抑制するように働く。また、攻撃度 H ユーモアは、相手との親密度が高い場合は、発話が面白おかしいものであるという認知を高めることで、肯定的感情を生起させるように働く。攻撃度 L ユーモアが肯定的感情に影響を及ぼす過程も基本的には同様であるが、攻撃度 H ユーモアのように、直接的に親和的な意図の解釈を弱めることはなく、発話が攻撃的であるという認知を介して、親和的な意図の推論を弱める。ここまでみてきたように、攻撃的ユーモアが肯定的感情に影響を及ぼす過程には、拮抗する2つの過程が存在する。1つは、親和的な意図の推論の低下を通して肯定的感情を抑制するネガティブな過程であり、他方は、面白おかしさの認知を介して肯定的感情を生起させるポジティブな過程である。標準化間接効果と標準化総合効果の値（表3）をみると、肯定的感情が生

起されるか抑制されるかは、拮抗する2つの過程からの影響力のうち、どちらが強いかによって決定している。相手との親密度が高い場合は、攻撃度Lユーモアが面白おかしい発話であると強く認知され、ポジティブな過程の影響力がネガティブな過程の影響力を上回ることによって、肯定的感情を生じさせることが明らかとされた。Norrick (1994) は、親密な関係における攻撃的ユーモアに対する受け手の親和的意図の推論が、攻撃的ユーモアのポジティブな対人的機能を生じさせることを示唆していたが、本研究によって、受け手による攻撃的ユーモアに対する面白おかしさの認知もポジティブな対人的機能のひとつである受け手の肯定的感情を生じさせるための重要な要因であることが示された。

本研究の限界と今後の展望

本研究で得られた結果は、実験で設定した場面固有のものである可能性があるため、結果をどこまで一般化してよいかについては慎重な議論が必要である。本研究では、からかい研究の知見を援用して場面の設定を行った。塚脇・越・樋口・深田 (2009b) は、攻撃的ユーモアの使用動機には、関係構築動機、不満伝達動機、他者支援動機、印象操作動機、および自己支援動機の5つあることを明らかにしており、ここから各動機に対応した場面を想定することが可能である。今後の研究ではこれらの場面を設定し、攻撃的ユーモアの対人的機能について体系的な研究を行っていく必要があるだろう。また、本研究では、肯定的感情という限定された従属変数において攻撃的ユーモアのポジティブな対人的機能が示されたに過ぎなかった。攻撃的ユーモアがポジティブな対人的機能をもつためには、語調の変化や表情などの手がかりによって、それが辞義通りの意味でないことの手がかりを示す必要があるという指摘がある (Keltner et al., 1998)。今後の研究ではこのような要因も含めて攻撃的ユーモアの対人的機能を検討していくことで、その他の従属変数においても効果が検出される可能性があり、攻撃的ユーモアがポジティブな対人的機能をもつための条件がさらに解明されていくと考えられる。

注

1) 本研究では、対人的機能という用語を、「2者間のコミュニケーションを基本とする対人コミュニケーションにおいて、送り手のメッセージに対する受け手の反応を生じさせる作用」という意味で用いている。

引用文献

- Colman, A. M. (2001). *A dictionary of psychology*. Oxford: Oxford University Press.
- Endo, Y. (2007). Divisions in subjective construction of teasing incidents: Role and social skill level in the teasing function. *Japanese Psychological Research*, **49**, 111-120.
- 遠藤 由美 (2007). 役割と社会的スキルがからかい認知に及ぼす影響 関西大学社会学部紀要, **38**, 119-131.

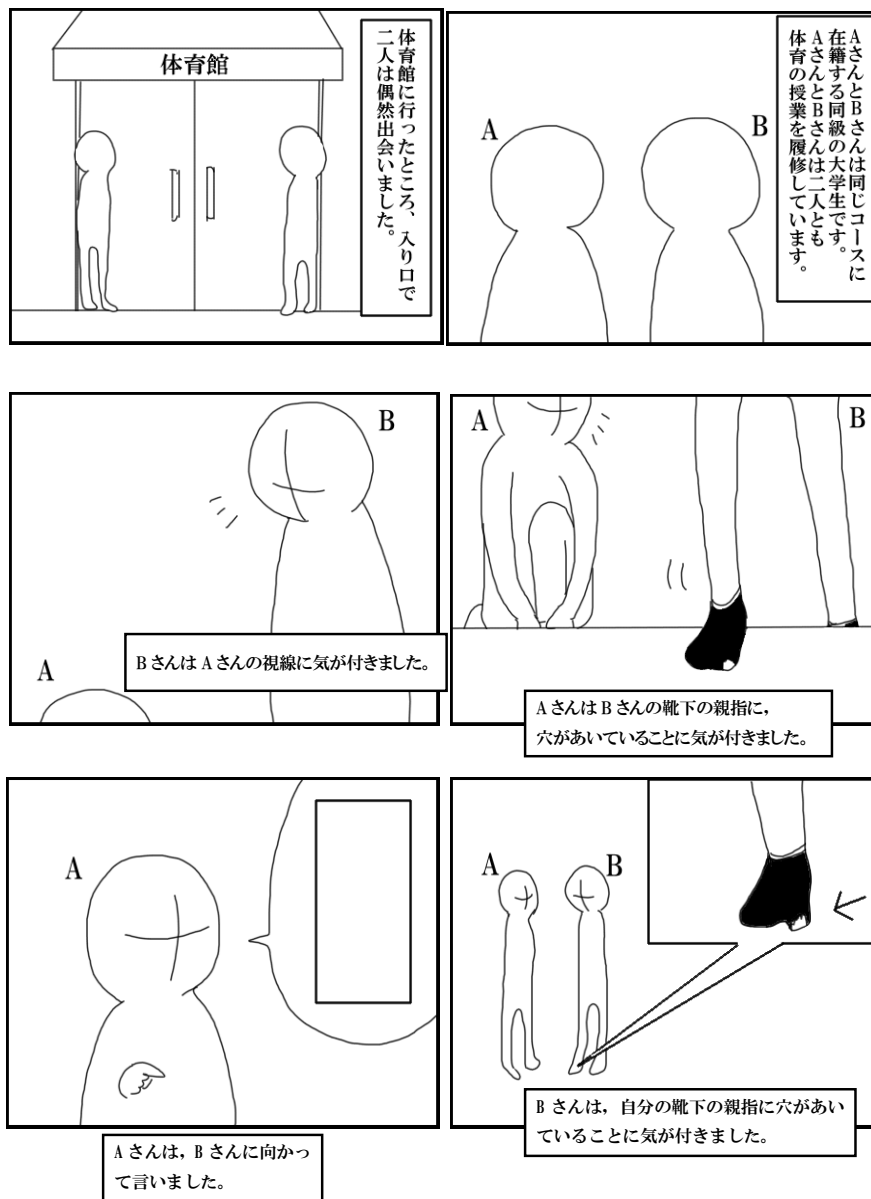
- 遠藤 由美 (2008). からかいの主観的理解——役割と他者への一般的態度の影響—— 関西大学社会学部紀要, **39**, 1-16.
- Gruner, C. R. (1976). Wit and humor in mass communication. In A. J. Chapman & H. C. Foot (Eds.), *Humor and laughter: Theory, research, and applications* (pp.287-311). London: Wiley.
- 石村 貞夫・石村 友二郎 (2012). 重回帰分析におけるダミー変数の解釈について 鶴見大学紀要 第4部, 人文・社会・自然科学編, **49**, 93-97.
- 伊藤 大幸 (2007). ユーモア経験に至る認知的・情動的過程に関する検討——不適合理論における2つのモデルの統合へ向けて—— 認知科学, **14**, 118-132.
- Keltner, D., Capps, L., Kring, A. M., Young, R. C., & Heerey, E. A. (2001). Just teasing: A conceptual analysis and empirical review. *Psychological Bulletin*, **127**, 229-248.
- Keltner, D., Young, R. C., Heerey, E. A., Oemig, C., & Monarch, N. D. (1998). Teasing in hierarchical and intimate relations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1231-1247.
- Kowalski, R. M. (2000). "I was only kidding!": Victims' and perpetrators' perceptions of teasing. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 231-241.
- Kruger, J., Gordon, C. L., & Kuban, J. (2006). Intentions in teasing: When "Just kidding" just isn't good enough. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**, 412-425.
- 牧野 幸志 (2007). ユーモア 岡本 真一郎(編) ことばのコミュニケーション——対人関係のレトリック—— (pp.117-140) ナカニシヤ出版
- Martin, R. A., Puhlik-Doris, P., Larsen, G., Gray, J., & Weir, K. (2003). Individual differences in uses of humor and their relation to psychological well-being: Development of the humor styles questionnaire. *Journal of Research in Personality*, **37**, 48-75.
- 文部科学省 (2016). 平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果(速報値)について 文部科学省 2016年10月27日 <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/10/1378692.htm> (2017年5月30日)
- Mooney, A., Creaser, R., & Blatchford, P. (1991). Children's views on teasing and fighting in junior schools. *Educational Research*, **33**, 103-112.
- 野村 亮太・丸野 俊一 (2008). ユーモア生成理論の展望——動的理解精緻化理論の提案—— 心理学評論, **51**, 500-525.
- Norrick, N. R. (1994). Involvement and joking in conversation. *Journal of Pragmatics*, **22**, 409-430.
- 大淵 憲一 (2002). 人間関係と攻撃性 島井 哲志・山崎 勝之 (編) 攻撃性の行動科学——健康編—— (pp.17-34) ナカニシヤ出版
- Radcliffe-Brown, A. R. (1952). *Structure and function in primitive society*. London: Cohen & west.
(ラドクリフ-ブラウン, A. R. 青柳まちこ (訳) (1975). 未開社会における構造と機能 新泉社)
- Shapiro, J. P., Baumeister, R. F., & Kessler, J. W. (1991). A threecomponent model of children's teasing: Aggression, humor, and ambiguity. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **10**, 459-472.
- 寺崎 正治・岸本 陽一・古賀 愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, **62**, 350-356.

塚脇 涼太・深田 博己・樋口 匡貴 (2011). ユーモア表出が表出者自身の不安および抑うつに及ぼす影響過程 実験社会心理学研究, 51. 43-51.

塚脇 涼太・樋口匡貴・深田 博己 (2009a). ユーモア表出と自己受容, 攻撃性, 愛他性との関係 心理学研究, 80. 339-344.

塚脇 涼太・越 良子・樋口 匡貴・深田 博己 (2009b). なぜ人はユーモアを感じさせる言動をとるのか?——ユーモア表出動機の検討—— 心理学研究, 80, 397-404.

補助資料：場面想定法で使用した6コマから構成される漫画



Does aggressive humor have positive interpersonal functions?: Relationship between closeness with another person and aggression levels

Ryota TSUKAWAKI (Hijiyama University)

This study aimed to investigate the positive interpersonal function of aggressive humor through an experiment. The degree of closeness with another person (high/low) and the level of aggression in aggressive humor (high/low/control) conditions were regarded as independent variables, and utterances without humor were considered as the control condition. The dependent variables were interpersonal cognition, affirmative feelings, and negative feelings towards the person expressing aggressive humor, as well as the intention to continue the relationship with that person. One of the six types of scenarios in which closeness and aggression levels were manipulated was randomly assigned to participants, and the dependent variables were assessed. The results indicated that aggressive humor evoked negative feelings regardless of the level of aggression. Humor with high aggression led to deterioration in interpersonal cognition and decreased the intention to continue the relationship. When the level of closeness was low, humor with high aggression inhibited positive feelings. However, aggressive humor had positive interpersonal functions, such as evoking affirmative feelings, only when the closeness level was high and aggression level was low.

Key words: aggressive humor, closeness, interpersonal cognition, feeling, intention to continue the relationship.